

歌日本紀行 第7回 「夕焼け小焼け」

故郷を後にしていく、夕暮れ時の切ない思い

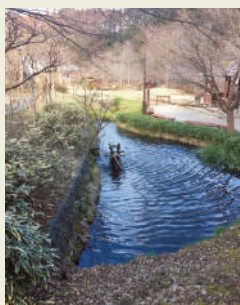
夕刻を知らせるメロディとして、多くの地域で馴染み深い「夕焼け小焼け」。この歌が生まれた背景には、ある一人の教師が愛した故郷の景色があった。



八王子市の西部に位置する恩方地区の景観。

ものごとの始まりや終わりを告げるときには合図がいる。禅の修行では、鈴の音で起床を知らせる「振鈴」や魚の形をした木の板を叩いて食事の開始を知らせる「梆(ぼう)」があるが、一定した「時と場合」を知らせるために音を鳴らすという行為が、その後も連続と続いた。軍隊や学校生活、日本の会社などにも多く取り入れられていた。

そこにある日、「音楽」というメロディや情緒が加わった。静岡県浜松市を代表する企業「ヤマハ」は、世界最大の楽器メーカーとして知られている。なんでも、この工場の始業、正午、終業などを告げる合図が「音楽で時を知らせる合図」の最初だといえる。



八王子市上恩方町にある「夕焼け小やけふれあいの里」は市民に親しまれる公園だ。

機能的な音色が、空襲警報や災害警報など、戦時下の嫌な思い出を連想させることから、このメロディ型合図に変更されていったというのだ。

街の公共の合図、学校の下校合図、電車の発着音など、メロディ型合図はいまではあたりまえの「街の音色」だ。もちろん、さまざまメロディが使われるが、この「夕焼け小焼け」ほど、「帰宅」の合図に使われた(あるいは使われている)曲(メロディ)はないと思う。メロディには歌詞がつく。そ

「夕焼け小やけふれあいの里」にある雨紅直筆の歌詞。



夕焼け小焼け (作詞:中村雨紅 作曲:草川信)

夕焼け小焼けで 日が暮れて
山のお寺の鐘が鳴る
お手でつないで 皆帰ろう
鳥と一緒に 帰りましょう
子供が帰った後からは
まるい大きなお月さま
小鳥が夢を見る頃は
空にはきらきら 金の星

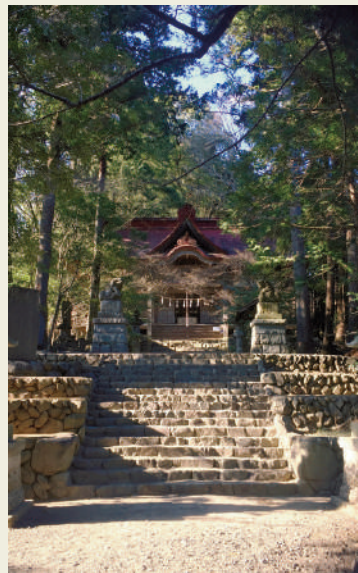
JASRAC 出 1703486-701

のまま歌詞入りの楽曲として流されることは少ないにしても、合図としてのメロディを聞いた多くの人たちは、その詞の世界から情景を思い浮かべ、自身の郷愁や思い出へと投影する。1897年(明治30)生まれの中村雨紅(うこう)は、東京の中心部から電車で一時間半(当時の時間)、そこからさらに4里(約16km)歩く、東京の西端に位置する、恩方村(現在の八王子市)の情景を二片の詞に託した。それが、「夕焼け小焼け」である。

中村雨紅は当時、荒川区日暮里の小学校で教鞭をとっていた。雨紅は、14歳の時、生まれ育った恩方を離れた。東京中心部で過ごす若い時分、休日以外はなかなか美家に帰れない。長旅で美家に帰ると、その安心感からか、つい長居をしてしまっていた。東京に帰る時間が遅くなる。電車が出る八王子まではバスもな

く徒歩しかない。4里の道をトポトポと歩いていると、日の長い夏でも途中で日が暮れた。切ない思い。夕焼けが故郷の山々を真っ赤に染め上げた。「夕焼け小焼けで日が暮れて山のお寺の鐘が鳴る」「恩方の夕暮れは当時、日本のどこにでもある風景だった。だからこそ、それが大勢の人々の共感と呼んだ。中村雨紅の遺族のひとり、後の取材(朝日新聞)多摩版2004年)でこう答えている。八王子市は、童謡「夕焼け小焼け」を大切にし、駅の発着メロディに採用した。また、中村雨紅の生家(宮尾神社)周辺に「夕焼け小やけふれあいの里」という自然を活かした公園をつくり、その豊かな想像力と成果を偲(しの)んでいる。現在、八王子からバスがあり、恩方までは、約30分で行くことができる。東京の一角であるが、とても東京とは思えない、いや、日本の中心である東京だからこそ、こんな郷愁を誘う普遍的な景色が生まれるのか。そんな思いにとらわれる情景がある。「私の童謡は叙情的なものばかりだが、現実には材を得たものでも、あくまでも叙情の夢を盛りたい」(『信濃毎日新聞』1959年)。これは雨紅が残した、故郷を慕う教育者としての思いである。

(中丸謙一朗)



中村雨紅の生家、宮尾神社には「夕焼け小焼け」の歌碑が建てられている。